

第2詩集

失速する魚群

大学時代の前半20歳―22歳の詩集。
当時後藤正紀氏が主宰していた、エリア39やアポリアといった同人誌に掲載されたものである。当時の敗北した学生運動の焼け跡の虚無が鏤められている。社会から個人への回帰。

秋の入口

(標識は――夏の灼け爛れた記憶には冷たく別れを告げませう)

そして私は一体誰に手を牽かれ

あの橋を渡って逝けばよいのですか？

(おや風鈴ですね！)

あれは屹度

離別してきた夏

へ置き忘れた砂時計

砂の上へ影を置き忘れた

寂しい女の腰の縊れ

流砂々螺沙羅

けれども何をも

風が漂白くしてゆく

何もが色彩を喪なってゆく

風は

季節の裂け目へ自らを失い乍ら

吹いてゆく

橋の向こうには空白の顔たちが

淋しそうに手を振っているのですよ

紛れもなく（私）に対して

空白な顔たちは手振る

彼方！

に光る物体「物質物界物象」

は飛行機ではない

あれは静止した雲

其の奥には

光る大気

秋の

心

臓

（想起しませう秋の朝は

眼が潰れる光の鳥は群舞する

でももつと寂しいことには

私の屍を埋める為の

ひとつの情景を孕んでいるのです

直線的な朝の棺桶の上に！）

死は何て

秋の手の届く所では

美しく刃物のように光る

魚のような刃物

雲のような魚

孕む呪われた瞑妄の生物群

(内乱？叛乱？とにかく予感！)

あなげに！

私はいつ迄もこの橋を渡っているのですか？

の 橋 を 渡 っ て

いるのですか？

恰も終了しない行為の如く

私は手を牽かれ渡っている

(白い夏の灼け爛れた記憶には

冷たく別れを告げましょう)

告げましょう

告げましょう

告げましょう

告げましょう

でも橋の向こうには

空白の顔たちが淋しく笑って

いるのですよ(風鈴は?)

あれは崩れた砂時計

私の手をいつ迄も牽いているのは
誰？

ああ私は！
橋から見下ろしてはいけない！
そして空白の顔した私の魂が！
ゆらゆらと揺れているのを！
見てはいけない！
いけない！

（標識は——□——）

秋の解読

序（プロローグ）

私の傲慢な胎児が宿る
彩られた曇天の棲家に
熱病を装う瞑妄の男と
自らを夜毎虚飾する女
西暦70年曇天の秋は
捏ね廻すだろう
私の色褪めた告白を
何如に私の脳壁の刻印は
亡霊となり彷徨う
古代隊商の遺文
のように沈黙
しているかを——

◎アキ・の・解読

秋空に光る

あの文字盤のない時計
における解読

に纏わり想起された
少年期における私の

割れて了った瞳（鏡の如く！）

その破片を拾い集めることは

碧空

という性的に冷たく流れる液体が

太陽の嫉妬と欲情とを飲み干した

還らぬ季節への哀しい悔恨を

息苦しく吐き出している

草原に横たわる人々の風のような影

そして秋の空白への投射された

淋しい告白

とを喰み尽くしてゆく事象

から始まった――

――追想として。

碧空の上界にある

白い垣根に居て走り去っていった

あの夏の日の淋しく笑う女

の黝い乳房

にパラノイアの傷から流れた

血痕

を秘つそりと垣間視る彩かな欲情は

私から衝動を奪った

私の瞳は澄み切って

宇宙は硝子になった

真紅のノイバラと血痕とが巡って逝く

いまだに私の蒼ざめた秋の心臓を
棘を立てて巡っている

苦渋よ！

(あの夏垣間見た永遠よ！)

そして何故に割れて了った瞳 (鏡の如く！)

或いは合掌した手の中の

滅びゆく宝石

だが滅びても宝石だ宝石であるよりも眩く宇宙に散乱してゆく
もう再び拾い集めることはできない

◎罪状そして解読のヒント

茫洋として徘徊する刻

脳天を開いたように周りは発散だ

その虚妄の彼方に

白い煙を旗の如くに掲げている

透明な紋章の家々に

きのうまで棲んでいた家族

羽のような会話をするあれらの近親者を

惨殺すること

の罪状————を持って来た男は

(消えない責苦！)

そして幾度となく再び

秋について問えばそれは

感覚器官を喪った寂しい顔たちが

母のような優しい手で内蔵されてゆく

〈解読の内蔵〉

方程式は飛翔しようとしても

疲れ果てた追跡者の背後に
纏わり付くのは明るい葬列
光の棺の内には
空白が横たわっている
ああ私の萎えた衝動と
散乱した欲情との
哀しい変身よ

それがいつどこで為されたのかを
だともはや語ってくれる者も
いない

この手で惨殺し
散乱させてしまったもの

鍵（キイ）

ヒント

トケイ・ノイバラは螺旋化

葬列の心象には紅い呪文或いは

翻る宇宙（コスモ）すなわち碧く拡散し

この数学者を糾弾するとき

紫光のコップの中のレビユ

コップの中の隔離された碧空

それが恐らくは

鍵（キイ）！

正（まさ）しく

ヒント！

（反歌・光ル大気ノアル風景）

赤イ髪ノ女ガ待ッテイタ。

アノ都会ノ内部ニ独リ。

秋ヲ解読シタ光ノ女――――

アノ女ハ佇ンデ笑ッタ。

シカシ秋ハ其レヲ、

光ト思ッテ、

眩シゲニ瞳ヲ逸シテ、
走り抜ケテ了ツタ。
振り返リモセズ。

記・一九七〇秋

小詩群・偏光感受

世界（宣誓）

私は私の頭脳に対して唐突にダイナマイトを投げ込んだり
私の肛門へ砕けた硝子片を執拗にネジリ込んだり
私は致しません、いつも
感性の透った壁に凭れ掛かって憂色深く
無感情の詩（ポエム）ノートへ散りばめるための語片を
占星術の教典から拾い集めたり
私は致します、そして
疲れたら水晶のように冷たい寝台（ベッド）に横になって
星座表を廻転さすような仕事に取り掛かります
世界はそうして私の脳室の天井に存在しています

弦薔薇に寄せる妄想

夢醒めの朝はいつも歯車の軋みで
東方の朝焼けを弦巻バネの胎動で
ネジレの艶歌流聴する空洞風風ぎ
豊饒の内的空腹引き摺る舌纏れて
絡み付く暁の情念秘めやかに勃せよ！
弦薔薇に関するセツルメントは徘徊より
回帰の絹擦れ破綻する奔走の閃光へと
仄かに芳香する鱗粉発現する幻象の刻
飛翔！汝飛翔せよ上界の陥落したパラノイア
欠落没落の敗的意情充滿する胸郭露呈せよ！

如何なる垣間視を以て終焉とし幕引くか
饒舌な逃亡者汝の背徳より昇華し
天を覗き観るヌプリと美化されるか
輪廻の地を這う発芽の賛歌（オマージユ）に塔乗して
追い縋る虚妄の所作造形する機織人
汝の生命弦薔薇の如咎有るを以て認識せよ！

エ氏の奇怪な夢

オレの墓標を齧ったのは誰だ！彷徨横丁の
歯だらけのマスコミユニケイション純正部品白日に
男根大的に蒼い観察者の歯軋りから零れる
ヌードアルバム断頭台への灼夏の行進垣間見る
大地戦慄にカーテンコール頭脳痙攣ざんばら翻し
尖鋭なる発毛ベニバラ的放言放出射精揮々々々々々！

あわれ陰の入江の砂漠の腹上のノタ打つ酩酊の
血痕倒錯ならぬ衝動は汝の意識深層へ飛翔せんと
其の脱毛かまびすしき凌駕感身持ちならぬさらば
尚も否定せよ我が頭蓋を齧る情念彷彿として

北回帰線へ波動する赤道七周半毎秒！

破綻走行

閃く脳天その破瓜の懐想より

垣間視の思想もつれてより

諸手翳す歩行者天国より

失踪のモチーフ蝕まれてより

躁鬱 Zippou 列島転覆されてより

倒錯に取付かれた饒舌者の背後より

轢き殺せ

挽き廻せのアジビラ舞いつつ

節穴のプラネタリウムは閉窓するのみだ

震撼として塞ぐ上空よりの侵入者

或いは不条理の螺旋群及び営林

恰も確信して蒼褪めの小宇宙

レール条理の気配を廃して

遠方は子宮の入り口扉だ

戦き？慄き？

埃を払う季節の幽邃だ

トタン屋根の物理的考察の目眩く

渴望の春への虫干しの時代だ

白金のギアの空転や軋みが

無機質な言語よりの生物の発毛を

脱次元的神秘性によって吹奏する

この摘まれた性器の埋葬に於ける

出発や帰順のない安息日（サバス）だ

美しい宇宙観の日和だ！

（透明な羽根に満ちた小宇宙）

しかも全く――

天窓の下の蒼褪めの小宇宙に

蠢く蟻痒感レプラの羽根を輝かせ

光の埃を払う季節の訪れを実感するとき

私は私の分身！

透明の羽根を震わせる

ああ私は分身私の分身！

おまえは日昇る以前の胎動の紫光を

絶望の闇間よりの出帆の為に収束させ

おまえの脳天に翻る上界への発動に

憧憬の諸手を蛇首の如く伸長させ

雲散させよ末世の解脱の行方に

ああ透明な羽根に満ちた界限を

掌握する情念の交わりの前夜（イブ）に

焦燥する短絡の殺害者（マードラア）を目撃せよ

尚もきらびやかな透明の羽根の陰に！

E氏の初日の出

（暗黒な海を凝視していることの意義――

ケープイヌボウの遠視眼的な慈愛は

71年を胎動させ得るか？

という類いのアレゴリーは自爆するか？）

人間達は鉄面皮ひっそろえて

永遠の方向を見つめているつもりです

あの辺か、あの辺か、あの辺か

ほらだんだんとしらけてきた

条光がほら

初日／71！

そうして彼らは

永遠にみつめていた

いつになっても太陽は出なかった……

蛾城

また夜明けの訪れ、既に幾日、眠りの無い日々が訪れ去つただろうか、と記憶を手繰る、あの青い静脈の、透けて見える太陽がまた、風船のように昇つてくるかと思うと、ぞっとするから、私は耳穴を塞いで、頭蓋に反響する、遠い日の唄の残骸を捜していたり、それに腐心すると瞼を閉じて、暗黒の空間を独り散策する、と恐らくは遙か意識の彼方に、微かな光の地点が発見される、或いは蜃気楼か、と双眼鏡を目に当てれば、そいつは城郭なのだ、近づこうとして歩いたら、何ヶ月もの時間が経ったが、城門に立ったとき、私はもう城郭の中に居た、ロジネスな空が在って、シラスを耕した畑には、デリケートな植物を栽培する男が居て、尋ねるとそれを、猜疑心と名付けたり、更に聴いていると、第六日曜日に礼拝堂へ押し掛けてくる二日酔いの女が居て、この生命たちに南方の毒液を注いでゆくのだと嘆いたが、その美しい仕事の価値を知らない者を、私はひどく哀れに感じた、冷たい春の午後だった、塔のてっぺんで、盗聴器が光った、なぜにパラノイアは発狂したか、という稚拙な条理に対して、私は今目的には、非常に冷淡である、それが応答でもあるが、とにかく全く水が不足していて、言語までが風化されてゆく。

落日落日（落日）

赤の円体は西方メガロポリスの憂愁の上縁垣くぐって

秋冬といつも石灰質化を強化していった

血になったり火になったり

陥落してゆくバベルの目撃者！

俺等現代のバルバロイの体内を流動せよ

あわれ落日落日落日！

豊饒の紋章は剥がされ円空になった

枯渴した道路の生育は忌わしい亀裂と具象され

俺等木のスプーンくわえて

蒼いホッテントットのなろう

さても消失してゆく残影は埃まみれ或いは煙って

メガロポリス墓石の無秩序（アンバランス）な羅列だよ

カラスが批判している

色褪めの森の上界

都会の虚無の上空

夏眠

昨日去っていったあいつは今日はもう

あの透けた真昼の月のなかで手振って笑う

(俺の心臓はペニシリンで透明)

マドギワの悲しみは6月の静物

庭先の木蓮は過ぎた思春季

おお甘美な崩壊の日日を回想する

不条理の鎮魂曲(レクイエム)を内臓した

辛夷の爆発は遠い音響

やがて水葬のナツ(夏)がきて

全ゆるアフロディテの股間を滴る

全ゆるヴェニスを水没し

我らさいごの6月の黝い森を捨てるとき

しかし既に円形劇場(コロセウム)は鳥の棲家

（東方へと逃水を追撃する行列は
脳ミソを露出して太陽に捧ぐ

太陽神（アラア）はいつからか
胎教に熱中していて

水牛は蜃気楼を引き擦って
いつてしまった

無関心な鉦夫達の関数的な夏

日時計は水没せよ！

無数のカミソリの葉に満ちた

枳殻（からたち）の殺意は蒸散せよ！

昼と云うのに月明かりのまどろむ歩兵の帰還

蝶道の閉鎖はあらゆる銃口の両足切断

都市を呪え！

残飯は放水路へと流せ！

全ての水路は虚構

経路はネジレのテトラポット

真昼の冥王星はネガティブに印画されて

流れてゆくよ白い水面を！

日時計は水没せよ！

無数のカミソリの葉に満ちた

枳殻（からたち）の殺意は蒸散せよ！

昼と云うのに月明かりのまどろむ歩兵の帰還

蝶道の閉鎖はあらゆる銃口の両足切断

！え呪を市都

！せ流とへ路水放は飯残

全ての水路は虚構

経路はネジレのテトラポット
真昼の冥王星はネガティブに印画されて
流れてゆくよ白い水面を！

まつりへ

(一)

祭へ行こうと電車で飛びのつたが
祭は既に終わってしまっていた！

そんな生活がここ幾日も続いたので
すっかり憔悴してしまっている。

なぜか祭は

私が車内で憧憬しているころ

視えない目的地で

爛熟して割れた！

狂ったザクロの生長のように

不浄の血液を

然し彩り美しくカムフラージュして

(その方法が問題だが)

混乱の中で旨く排泄してしまつたらしい。

「不知の空間での秘められた演出によつて
随胎は完璧に（パーフェクト）に遂行された」

（哀しい胎児たちは

どの水路より流されたのだろうか？）

けれど全ては想定にすぎない。

ああまたしても今日

祭へ行こうと電車に飛びのつたが

祭は既に終わつてしまつていたのだ。

どうしても

祭は私を疎外するのであり

どのように焦躁したとしても

私は決して祭に間に合うことがない。

ああ、私は祭に交わることを欲望する！

（二）

私の思考体系は

空白の時差を孕み

あるいはその間隙に於いて苦悶したりしており

其の苦悶の刻みに於いては

祭は幻象ではなく

（確証をもつて！）

祭は実在したのであり

即ち

何となればその虚脱こそは

祭の肥満した豊饒の肉体から

あらゆる繁殖の動因即ち

老化した臓器の数々

を抉り掻き出した
と云う

全く脱臭された空洞の小宇宙だ！

ああ何と云う哀しい肋間よりの垣間見。

何と云う虚脱。

そして思考も虚脱。

と同時に

漂白されゆく情念。

ああ祭よ！

祭は

いつ終わってしまったと云うのか！

然るに

疎外もこれ程徹底してくると

価値座標系も変換してゆくのである。

無イシキな内に回転しつつある。

ある種の自己合理化が

内分泌機能の如くに旨く機能して

完全に統制されているとも云える。

そのように

回転はいつも smooth であり、

比類なく滞ることなく機能する。

だがもう

破壊の季節が疾駆している。

もうじきここへ来る！

『自己内へ爆弾を投げ込む準備をせよ！！』

ホルモンはアンバランスに発射せよ！！』

そして

奇形の植物で観念空間を占拠せよ！！』

おまえは奇形で構成された正常になれ！

おまえは奇形であつても奇形を隠蔽せよ！
カムフラージュせよ！

でなければ
おまえは寂しい。
わたしは寂しい。
とにかく寂しい！

(それにしても又も私は)
祭に間に合わなかつたのである。

私は寂しさから逸脱する機会(チャンス)を失つた。

ああ

祭に会いたい！

祭はチャンス！

カムフラージュ！

の！

チャンス！

電車。

急行せよ！

祭を！

追跡せよ！

(三)

だがやはり

今日にしてさえ

私を待つのは

祭の跡と

その虚脱。

絶対それは宿命的であり

ああ！

私は極めて冷静を装い

自身を慰めるように秘そやかに生活するが
本当は

満腹の飢餓人のように

胎内は自己合理化の消化不良物で一杯だ！

完全に

ある種の便秘症状であり

精神は崩壊しようとしており

人格は破産してしまふに違いない。

ああ今にも私は

自己の欲望を食べ始めるだろう。

自己の性を齧ることを始めるだろう。

自身を本能の指示のままに

自身の消化器へとくべ始めるだろう。

ああ生贄を！

私を救うには犠牲（いけにえ）を！

私は祭の炎に生贄を翳そう。

蕩けゆく皮下脂肪の幸福を翳すのだ。

そしてそのように

私は私から逃亡する。

これは全く聖なる儀式と共に完遂される。

ああ何と云う聖なる逃避！

（と云う名の自己美化よ！）

果てしなく、祭へ！

然し通過する駅々では、

その背負う暗い町々では、

悉く祭は終了してしまつていて

遂に私の目的地は余りに果てしなく

私との距離を隔ててゆくではないか！

私は流れる私の涙を舌に受けるとき

祭への情愛は嵩じ、さても

祭への絶望を知るとき、だが

なぜに排泄し尽くせぬ液体なのか。

ああ何と云う甘美な液体。

爛熟のザクロを慕いつつも

これらはやはり土壌へと流せ。

やはりやはり土壌へと沁ませよ。

やはりこれらはやはり土壌へと回帰せよ！

おまえはおまえの夢が

嵐の中で必死に彳亍む世界（たたずむところ）から

おまえの母胎がおまえの墓標を抱く世界へ

今夜未明、回帰せよ！

そこには今夜

おまえを受け入れる快楽がある

それを求めておまえは踊れ！

おまえは哀しく舞踏せよ！

時空の裂け目で酩酊せよ！

ああ其の時

〈祭〉は幻象化する。

おまえの為に

祭は乾杯する！

即ち

祭が！

きつと素晴らしい慈しみと

繊細な優しさに満ちて

その懐かしい愛撫を繰り返す時

おまえの母胎は悶絶するだろう。

美しく

情景（パノラマ）は巡り。

(五)

さてこの電車は

その方向はダイヤグラムと逆であり

今宵その通過する町々は

おまえに8の幻想を贈る。

気付いたと思うが

この電車は或る一地点を|目指して

今宵その反性の走行は

持続して止まない。

まつりへ！

空腹なる詩季

Birthday.

あの日

季節をどうしても思い出せない

あの日、僕は朝食
の窓から

蒼白の果実の落下

をみた

夜明けの生誕直前の太陽

の突然流産された（衝動）

あれを

あの日

から日日

僕は自分の生殖器の内部に潜ませて
生きてゆかねばならなかったこと
は、けれども屹度

不幸ではなかつたはずだ。

なぜなら

あの日

すっかり怯えていた黄昏の自然の中で

夕日さえも蒼褪めて

貧血風の欲情をその

両の脚の間にブラ下げていたのだが

戸口の外には多分

幼いアナタが

ぽつんと

佇んで

いた

の

だから

Sabbath.

五月の

食卓（テーブル）にはいまも

曇ったニッケルフォークが

風化されることなくしずかに

眠っているだけである。

謝肉祭の散会は

砂塵を吹き上げ

四月の食卓を埃まみれにした

という伝説

それだけが春眠していて

《晩霜》

なぜに上空は

空腹の暗雲を孕み

本意なき出立の悔恨に満ちているか
と

時代は終わった！

私と私の幻想の才（タレント）にとって

あのブリリアントな開窓の時代は
終わった。

（虚無へた吹き込む

懐想の風の中へと

力なく、誘われようか）

21th Summer

21番目の夏は

私から

感傷の泉に水汲む歓喜を奪い

ただ無意思の季節の形式に因み

白いムジヒの太陽光線を照射する

海の見えない砂丘に

涸れた貝片の残骸が

キラキラとキラめくのを

ツルバラの生垣が大理石的に無機質化

しているのをヒドク心痛し乍ら

私は廃村で

熊蟬の洪水に身を委ねてみつめた

巨大な高積雲の如く迫りくる
《死》のイメエジが私の瞳を
風化させようと謀っている
ことを悉く恐れる

(何の変哲もない
日本列島のひる
ヒマワリは沈黙し
もう百年も変わらぬ村々の道のうねり)

Eye.

茫洋の砂丘
色彩喪失の海平原
石像や墓石や涸れた貝殻
そして、風に消された足跡。
あれから見たものはただ
遙か水平上を曇らせた
どす黒い蝗の大群
ああ
ただそれだけだ
あの把握できない遠方の
煙の移動
滅亡への飛行群
ただそれだけだったではないか！
既に時計も役に立たぬ程
久しく潮は繰り返され
この手に取り出してみる義眼も乾き
石の如くに風化されてゆく
いつかは砂状に風に散り
失われるだろう、しかし

失われてゆくものはいったい
何だと云うのだ

実際に何が失われると云うのか！

茫洋の砂丘

色彩喪失の海平原

石像や墓石や涸れた貝殻

そして、風に消された足跡。

風に消された

足跡。

At Harajuku

ハラジク周りに雨がふる。

涙の原宿ストリート。

いてふは散ります、秋まだ早くも。

いてふは落ちます、雨のアベニユ。

空曇よりと、秋・九月。

こころは冷えます、濡れるより先に。

もう夕刻でせうか？ いやまだ午后（ひる）だ。

だのにハラジク灯がともる。

涙にゆらゆら灯はともる。

ああ、サヨナラサヨナラサヨウナラ。

昨日（いつか）ぼくの心にユメついはんだ。

愛しい鳥たち、サヨウナラ。

もうじき雁も渡る季節（ころ）。

きみらも渡っていったのだネ。

それもいまでは遠い夢。

気紛れな秋の追想が。

きみらの虚しい影を呼ぶ。

ぼくの心は近頃では。

荒んでしまつてごきぶりだつて。
住めやしないさ、きみらにとつての。
ついでに夢などとうの昔に。
溷れてしまつてもう遙か。
ああ、ハラジクさみしい雨の舗道（みち）。
坂はてしなく光る路。
ぼくはどうして歩いているのか。
とにかくどうやら歩いているよ。
（歩いているよ）
いつかハラジク、春がきて。
ぼくの心に花乱れ。
きみらの還りを知るような。
そんな儂い夢だけが。
ぼくのヒトミに映つてる。
にじむ原宿、午后（ひる）の灯と。
（にじむ原宿午后の灯と———）

Autumn,

絶対零度な
透明な血液様のものが
抜け殻の蛇首の如くに
秋晴れの
都市のどこかの奇妙なアナから
あるいは
あちらこちらのそれらから
カマクビ擡げ
突然に！
地上侵入を謀った地底人のように
この黎明の
秋晴れ都市へと湧きいでて

虚構の経路、を伝い

即ち水管、地下鉄または放水路

即ち血管、神経管さらに精管

を昇り

ああ

近づいてくるのだ私へ！

ああ

近づいてくるのだいまにも！

凍る戦慄が私の行為を剥奪する！

と云うのは

脳天の日は傍観しているだけだ！

優柔不断の

あの太陽円は！

それゆえこの季節の硬直の内に

私の都市中枢は襲撃されるのか！

私の都市中枢は

誰に！

どのような生物体によって？

ああいまでも

夥しい

あれら擬生物の群生が

もうそこまできているのを・・・

Love.

その日、季節は空洞に満ちていて

真空の風が吹き込んでいた。

果てしなく長い橋に

更に長い影を引き摺って

私は立っていた。

恐ろしく永い時間が

一瞬に過ぎ去り

何もかもが風化しようとしていたのに

それでも私は待ち続けた。

太陽が風化して

崩れ落ちたとしても

その断片（かけら）を拾い集めてさえ

太陽の存在を信じ切っただろう。

そうして私のまわりで

世界はいつしか長い沈黙へと

のめり込んで逝くのが

橋の上から眺められた。

独りであることはもはや

生きていることをイミしなかった。

Eve.

その朝（あした）

白鳥はぬれる

新しい光の訪れ

美しいひと

アナタへの希いの

太陽の真下に結晶（クリスタライズ）する

目眩く宇宙の祝福を信じる？

（最期まで

あの巡り逢いの詩季への

懐帰のユメに生きた愛（かな）しい白鳥の死を

私は信じない）

だがついにアナタは視るのだろう

ああ、あの白鳥が

その躰は結晶された歓びに輝き

そのツバサを生まれたばかりの太陽に翳し

永遠の宇宙（コスモ）へと

羽搏いて逝く情景を

イヴ 7 1

最期の明日への

聖なる旅程。